

「分岐」考

名古屋石田学園 法人本部 顧問
星城大学 学長補佐 深谷 孟 延

1. 教材と授業

田中先生は、高校1年生の国語で、9月に室生犀星の『小景異情』を教材とし、4時間完了で実践された。

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

最終の第4時の導入を授業記録を見ると、下記のようなものである。

03 分	T 25	<p>はい。さあじゃあ今二人の人にね、読んでもらいましたけれども、さあ、今日はね、最後に作者、室生犀星はですね、この『小景異情』という詩を、どういう心境で読んだのかということに視点をおいて、えー、みんなで考えていこうかなというふうに思います。</p> <p>〔カードを貼る〕</p> <p>《作者はどのような心境で『小景異情』を作ったのか》</p> <p>さ、これですね。さ、これまでみんな内容についていろいろと勉強してきましたけれども、ちょっと今から先生四つ掲げたいと思いますので、考えながら聞いていってください。</p>
---------	------	--

04	<p> どういう心境で作ったのかということで。こんな視点で。 まず一つ目、《1. ふるさとに帰りたい》 それとも、《2. ふるさとには帰りたくない》 あるいは、三つ目。《3. ふるさとに帰りたいけど、帰れない》 この三つに、もしちょっとまた当てはまらないなというのがあればまあ4番という ことで、《4. 1・2・3以外》さあちょっと考えてみて。ちょっとマグネットの シート、名前書いたものを配りますので、自分の名前のやつを取ってください。 さ、いいかな？ どれか一つを選ぶとすれば、自分はどれを選ぶかということで。 それじゃあね、今から今配ったマグネット、名前書いたやつね。前に出できて貼 ってもらいます。自分が選んだところに貼ってください。 </p>
----	---

生徒たちが4項目に対して自分の名前のついたマグネットを黒板に貼った結果は、下記のような
ある。

1. ふるさとに帰りたい	4人
2. ふるさとには帰りたくない	0人
3. ふるさとに帰りたいけど、帰れない	27人
4. 1・2・3以外	0人

その後、グループ等で話し合わせ、終末時に自分の考えを書かせた結果は下記のようなものであった。

1. ふるさとに帰りたい	3人
2. ふるさとには帰りたくない	1人
3. ふるさとに帰りたいけど、帰れない	24人
4. 1・2・3以外	3人

私がここで問題とするのは、人数の変化ではない。生徒が詩のどこに着眼して、1・2・3・4の結
論を出したかということである。

そこで、最も人数の多い「ふるさとに帰りたいけど、帰れない」の24名の文章を中心に読んでみ
た。その結果、詩の「ふるさとおもひ涙ぐむ」の「涙ぐむ」に生徒の大半が集中し、涙ぐむ訳を次
ように書いている。

- | | |
|---------------|------------------|
| ・一人ぼっちでさみしいから | ・二度と帰ることがないから |
| ・弱気になっているから | ・つらい毎日を送っているから |
| ・大好きなふるさとだから | ・帰りたいのをがまんしているから |
| ・なつかしいから | ・ふるさとを強く思っているから |
| ・帰りたい思いが強いから | |

そして、何らかの帰れない事情があり、その事情を次のように推測している。

- | | |
|--------------------|------------------|
| ・一旗あげていない | ・乞食となってしまう |
| ・ふるさとに、親や友人など誰もいない | ・成功していない |
| ・親や友人に合わす顔がない | ・ふるさとは、(距離的に) 遠い |
| ・友人に気をつかっていて | |

私は、24 名以外の生徒の記述も見てみたが、基本的には同じであり、結論が 1・2・4 になったに過ぎない。

私がなぜ文章を分析することにしたかと言えば、生徒たちが詩をじっくりと読むよりも、感覚的に「ふるさと」を「金沢」と設定し、東京で金沢に思いを馳せた「望郷の詩」と解釈しているのではないかと思ったからである。

そこで授業記録から 4 時間の展開の概要を見てみることにした。

- | | |
|-------|--|
| 第 1 時 | ・意味のわかりにくい言葉の意味調べ (下の 5 つ)
一悲しくうたふ・乞食・うらぶれて・異土・あるまじや一 |
| 第 2 時 | ・犀星の年譜と時代背景の説明
・口語訳にする |
| 第 3 時 | ・平仮名と漢字の「みやこ」と「都」はどこか
・詩中の人物はどこにいるか・どこで歌ったか |
| 第 4 時 | ・作者はどういう心境で作ったか |

第 2 時と第 3 時の授業記録を詳しく読むと、第 2 時は、犀星にかかわる年譜で、犀星は金沢で生まれ 21 歳で上京したことを教師が説明するとともに、明治 31 年米原・金沢間の鉄道の開通を解説しており、この時点で、生徒たちの「ふるさと」は金沢に決定づけられたように思う。現実的には、

そうであり、間違いではないが、この時点で地理的に遠い金沢を思った「望郷の詩」という解釈の基盤ができてしまった可能性がある。

第3時で、平仮名と漢字の「みやこ」と「都」について話し合わせているが、結論的に「みやこ」は金沢で「都」は東京に落ちてしまった感がある。

生徒たちが話題にした「帰るところにあるまじや」について論議を深めることもなく T114「詩中の人物はどこにいるのか？詩中の人物はどこでこの気持ちを詩に歌ったんだろうか」と問い、T133「はい、えー今も同じく東京都だと。…東京は住むところ、帰るところではないから…」と締めくくる感じとなり、生徒たちを「望郷の詩」に追い込む結果となっている。

2. 二つの分岐点

田中先生がどう考えていたか指導案にある単元構想からは読み取れないが、観察者として授業を見てきた私は、このまま「望郷の詩」で終わってはならないと思った。この詩を左右する一つに「そのころもて」の一行があると思われるが、一度として話題の対象になっていない。私は、生徒たちに「ゆさぶり」をかける必要を感じ、田中先生に最終の第4時に「そのころもて」に着目させることを提案した。この一行でもって、金沢に対する「望郷の詩」が一転して、金沢に対する「決別の詩」となる可能性があると考えたからである。

私は、強引に「決別の詩」に導こうとしてほしかったわけではない。しかし、高校1年生であれば、2通りの解釈が「できる」「ある」ということを理解させておく必要があると考えたからである。中には、帰る先が、金沢でも東京でもなく、「架空の場所（心の中の世界）」という生徒が出てきてもよいのではないかと思った。

では、「決別の詩」への解釈の転換となるチャンスは第3時になかったであろうか。47分過ぎに下記のような場面がある。

48分	Sj 134	あの一、「あるまじや」のこの訳で、「あるだろうか、いやない」と訳さないと故郷を思う意味がないというか、意味が変わってきちゃうんで、後半の部分につながらないと思うんです、思います。
	T 135	つながらなくなってしまう。で、ちなみにSjさんたちはここをどう捉えた？
	Sj 136	みや、「みやこ」はそのままふるさとで、帰るっていうのは、自分は実際に帰れないけど心だけ故郷に戻るっていう意味で解釈しました。
	T 137	はい、ありがとう一、ちょっと書けなくなってしまったな。はいじゃあちょっとみんな前向いてください。今、今ねSjさん言ってもらったことを、これ一緒に

	した、「みやこ」はふるさとのことですよ。心の帰る場所という意味で帰らばやを捉えたんだけど、みんなに聞いてもらいたかったのは、ここをそう捉えるとこの部分を帰るところではないと考えなくちゃいけないということでした。(以下略)
--	--

Sj134の発言の「意味が変わってきちゃう」というところである。この発言を教師がもう少し重く受けとめ、「そのころもて」につなぐことができたならば、最終の第4時に「決別の詩」への展望が開けたのではないかと思う。そこが本時のみならず本単元を左右する分岐点であった気がする。田中先生は、第4時に自分は「1・2・3ではなく4」であることを「そのころもて」に着目し、考えさせようとしたが効果なく終わった。

ちなみにSjが終末時に書いた文章は下記のようなものである。

私は『あるまじや』の部分を『あるだろうか、いやない』ととらえ『かへらばや』を『かえろう』ととらえました。なぜなら、『ばや』を辞書で調べたとき、文語でも口語でも『自分が本当にしたいことができたという願望』という意味が多く載っていたからです。『ばや』を願望としてとらえられると、『帰りたいけれど帰れない』という意味が表されると思います。

また、この作者の状況は、東京（都）で成功してやろうと思い大好きな故郷を出てきたが成功できないかもしれないと覚えることが日に日に増え、仲の良い友人もまだ出来ていない（誰もいない）東京にいると考えるとずっと不安になり、寂しくなり、自分の生まれ育った仲の良い友人もいる温かい故郷に帰りたいたいと思っている。しかし、成功して帰ると言って出てきた以上、成功してないのに帰るわけにはいかず、帰れないのだと思います。

なぜこのような解釈になったのかというと、詩中の『ひとり都の夕ぐれに』や『涙ぐむ』というところから一人であることや、不安や寂しさなど負の感情を持っていることが読みとれる（感じとれる）からです。

しかし、詩の最初の二行よりこの状況はこの状況でまたいいのかもしれないと無理に自分に言いかけさせ納得させているのではないかと思います。

Sjは「望郷の詩」と解釈して終わっている。しかし、私は最後の2行、「しかし、詩の最初の二行よりこの状況はこの状況でまたいいのかもしれないと無理に自分に言いかけさせ納得させているのではないかと思います」を嬉しく思った。それは、明確にこの詩の命は「ふるさは遠きにありて思ふもの/そして悲しくうたふもの」にあると論じていることである。田中実践から、教材と授業展開における「分岐点」を学ぶことができた気がする。